

微分積分学 石毛和弘 *

講義ノート

司馬博文 J4-190549
hirofumi-shiba48@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

2019 年 9 月 30 日

概要

微分積分学②では、まず（2変数の）偏微分とその応用を復習してから、1変数関数の積分、次に多変数関数の積分へと進む。
Jacobian の計算などが、後期試験の花形になるであろう。最後に級数に触れて、微分積分学②の講義は締めくくられる。絶対収束と
いう概念を導入して、より詳しく収束を議論する。

第 I 部

偏微分とその応用

1 復習

1.1 開集合と閉集合の概念

定義 1. $D \subset \mathbb{R}$, $P \in D$

1, P が D の内点である $\iff \exists r > 0$ s.t. $B(P, r) := \{Q \in \mathbb{R}^2 | d(P, Q) < r\} \subset D$

*ただし, d とは距離関数で, $d(P, Q) = \sqrt{(p_1 - q_1)^2 + (p_2 - q_2)^2} = |P - Q|$

2, P が D の外点である $\iff \exists r > 0$ s.t. $B(P, r) \cap D = \emptyset$

$\iff P$ が D^c の内点.

3, P が D の境界点である $\iff \exists r > 0$ s.t. $B(P, r) \cap D \neq \emptyset$ $B(P, r) \cap D^c \neq \emptyset$

* D の境界点が全て D に含まれる $\implies D$ は閉集合. D の境界点が全て D に含まれない $\implies D$ は開集合. (D が開集合 $\iff D^c$ が閉集合).

*微積分学の考察対象は大体全て「領域」で定義されている.

定義 2 (連結・領域). D の任意の点 P, Q に対して, P, Q を結ぶ D 内の曲線が存在する時, D を (弧状) 連結という. 特に, D が開集合でもある時に, これを「領域」という.

定義 3 (点列). \mathbb{R}^2 上の点列 $\{P_n\}$ が, $P \in \mathbb{R}^2$ に収束する, とは,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} d(P_n, P) = 0 \text{ (これを } \lim_{n \rightarrow \infty} P_n = P \text{ とも書く.)}$$

*点列の極限は, 存在すればただ一つである.

*収束する点列は有界である.

*収束列の全ての部分列は, 同じ極限点に収束する.

定理 1 (Bolzano-Weierstrass の定理). (\mathbb{R}^2 上の) 有界な点列は, 収束する部分列を持つ.

定理 2 (Cauchy 列は収束する). 点列 $\{P_n\}$ が収束列であることと, 点列 $\{P_n\}$ が Cauchy 列であることは, \mathbb{R}^n 上では同値である.

* メールアドレスは ishige@ms.u-tokyo.ac.jp

ただし, *Cauchy* 列であるとは, 点列が

$$\forall \epsilon > 0, \exists N \in \mathbb{N} \forall n, m \in \mathbb{N} (n, m > N \implies d(P_n, P_m) < \epsilon)$$

を満たすこと.

* (remark) D が開集合 $\iff D$ から取り出した収束列の極限点は, 必ず D に属する.

定義 4 (連続性). $D \subset \mathbb{R}^2$ を集合, $f: D \implies \mathbb{R}$ を写像, $P_0 \in \mathbb{R}^2, l \in \mathbb{R}$ に対して,

$$\lim_{P \rightarrow P_0} f(P) = l \iff \forall \epsilon > 0, \exists \delta > 0 \forall P \in D (0 < d(P, P_0) < \delta \implies |f(P) - l| < \epsilon)$$

特に, $P_0 \in D, l = f(P_0)$ である時, f は点 P で連続であるという.

定理 3 (最大値・最小値定理). D を有界閉集合, f を D 上連続な関数とすると, f は D 上有界であり, その最大値と最小値を D の上に取る.

定義 5 (偏微分). f を点 (x_0, y_0) の近傍で定義された関数とする.

$$\frac{\partial}{\partial x} f(x_0, y_0) := \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x_0 + h, y_0) - f(x_0, y_0)}{h}$$

同様にして, $\frac{\partial}{\partial y} f, \frac{\partial^2}{\partial x^2} f, \frac{\partial^2}{\partial x \partial y} f$ を定義する.

定理 4 (Schwarz の定理). 点 (a, b) の周りで, f_x, f_y, f_{xy} が存在し, f_{xy} が (a, b) にて連続ならば, $f_{yx}(a, b)$ は存在し, $f_{xy}(a, b) = f_{yx}(a, b)$ を満たす.

Proof. $\varphi(x, y) := f(x, y) - f(x, b)$ と置く. 十分小さい $h, k > 0$ に対して,

$$\begin{aligned} \varphi(a + h, b + k) - \varphi(a, b + k) &= \varphi_x(a + \theta h, b + k)h \quad (0 < \theta < 1) \\ &= [f_x(a + \theta h, b + k) - f_x(a + \theta h, b)]h \\ &= f_{xy}(a + \theta h, b + \theta' k)hk \quad (0 < \theta' < 1) \end{aligned}$$

一方, φ の定義より,

$$\lim_{k \rightarrow 0} \frac{\varphi(x, b + k)}{k} = \lim_{k \rightarrow 0} \frac{f(x, b + k) - f(x, b)}{k} = f_y(x, b)$$

よって,

$$f_y(a + h, b) - f_y(a, b) = \lim_{k \rightarrow 0} \frac{\varphi(a + h, b + k) - \varphi(a, b + k)}{k} = h \lim_{h \rightarrow 0} f_{xy}(a + \theta h, b + \theta' h)$$

故に,

$$\begin{aligned} f_{yx}(a, b) &= \lim_{h \rightarrow 0} \lim_{k \rightarrow 0} f_{xy}(a + \theta h, b + \theta' h) \\ &= f_{xy}(a, b) \quad f_{xy} \text{ の点 } (a, b) \text{ での連続性より} \end{aligned}$$

□

定義 6 (全微分可能性). f を点 (a, b) の近傍で定義された関数とする. f が点 (a, b) で全微分可能であるとは, $\exists A, B \in \mathbb{R}$ s.t. $f(a + h, b + k) - f(a, b) = Ah + Bk + o(\sqrt{h^2 + k^2}) ((h, k) \rightarrow (0, 0))$ と定義する.

* f が点 (a, b) で全微分可能
 $\implies f$ は点 (a, b) で偏微分可能
 $\implies A = f_x(a, b), B = f_y(a, b)$

命題 4.1. f_x, f_y が存在し, f_x または f_y が連続. この時, f は全微分可能である.

* 特に, f が C^1 級の関数ならば, 十分に全微分可能である.

定理 5 (Chain Rule). $z = f(x, y), x = x(u, v), y = y(u, v)$ の時,

$$\frac{\partial z}{\partial u} = \frac{\partial z}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial u} + \frac{\partial z}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial u} \quad \frac{\partial z}{\partial v} = \frac{\partial z}{\partial x} \frac{\partial x}{\partial v} + \frac{\partial z}{\partial y} \frac{\partial y}{\partial v}$$

が成り立つ.

定理 6 (Taylor の定理). f : 領域 D 上の C^n 級関数 ($n = 1, 2, \dots$)

線分 $\{(a + ht, b + kt) | 0 < t < 1\}$ が D に含まれているとする. ここで, $F(t) := f(a + th, b + tk)$ と置くと,

$$f(a+h, b+k) = F(1) = F(0) + F'(0) + \frac{F''(0)}{2!} + \dots + \frac{F^{(n-1)}(0)}{(n-1)!} + \frac{F^{(n)}(\theta)}{n!} = f(a, b) + \left(h \frac{\partial}{\partial x} + k \frac{\partial}{\partial y}\right) f(a, b) + \dots + \frac{1}{(n-1)!} \left(h \frac{\partial}{\partial x} + k \frac{\partial}{\partial y}\right)^{n-1} f(a, b)$$

定理 7 (陰関数定理). $F = F(x, y)$: 点 (a, b) の近傍で定義された C^1 級関数. 点 (a, b) において, $F(a, b) = 0, F_y(a, b) \neq 0$ とする. この時, $\exists I$: 点 a を含む閉区間 $\exists \delta > 0$ s.t. $\forall x \in I$ に対して $F(x, y) = 0, |y - b| < \delta$ を満たす. y は唯一つ, この I 上の関数 $y = f(x)$ は C^1 級関数であり,

$$f'(x) = -\frac{F_x(x, f(x))}{F_y(x, f(x))}$$

2 極限

問: 周の長さが一定 ($= 2s$) の三角形のうちで, 面積最大のものは正三角形であることを示せ.

Proof. 三角形の三辺の長さを x, y, z とする. 対応する三角形の面積を S とすると, Heron の公式より,

$$S^2 = s(s-x)(s-y)(s-z)(2s = x+y+z) = s(s-x)(s-y)(x+y-s)$$

である. $f(x, y) = s(s-x)(s-y)(x+y-s)$ と置く. x, y が動く範囲は

$$D := \{(x, y) | s-x > 0, s-y > 0, x+y-s > 0\}$$

であるが, f に最大値が存在するには, D が閉集合でなくてはならない (すでに有界ではある). D の拡張 \overline{D} ,

$$\overline{D} := \{(x, y) | s-x \geq 0, s-y \geq 0, x+y-s \geq 0\}$$

上で f を考える. \overline{D} は有界閉集合で, f はその上で連続であるから, 最大値最小値定理 3 より, f は \overline{D} 上で最大値を取る. f は D 上正, D の境界点上で零なので, 最大値を取る点は \overline{D} の内点, つまり D 上で取る. その点を $(x, y) \in D$ とすると,

$$f_x(x, y) = -(s-y)(x+y-s) + (s-x)(s-y) = 0, f_y(x, y) = -(s-x)(x+y-s) + (s-x)(s-y) = 0 \implies x = y = z$$

よって, 面積の最大値を与える三角形は正三角形である. □